

「保育内容—環境Ⅱ」の研究授業を実施して

宮 本 富 夫*

Presenting the class “Environment Ⅱ (Content of Child care and Education)” to an open study of teaching

Tomio Miyamoto

Abstract

The class “Environment Ⅱ (Content of Child care and Education)” was opened to a study of teaching on July 1, 2008. In this class, ten thousands of wooden building blocks were used for teaching. The records of this class and the comments presented by our faculty staffs attended are presented. In addition, the responses of its class students and the impressions they have to this teaching material are also described.

Keywords: an open study of teaching, wooden building blocks, Environment Ⅱ (Content of Child care and Education)

はじめに

発達科学部子ども発達学科では、研究授業がセメスターに一度のわりで実施されている。2008年度の前期セメスターは、筆者の順となり、2008年7月1日に研究授業を実施することとなった。筆者が担当する「保育内容—環境Ⅱ」は演習形式で授業を進めているため、本来の意味からすると授業研究の対象としてそぐわない面をもつ。演習は与えられた課題に対し、受講生一人ひとりがそれぞれ個々に取り組んでいく性格を持つため、授業者が授業全体をとりしきるという形では展開されない。そのため、授業全体をどのように捉えていくかについて、難しい面があるように思われる。そこで、ヒノキ間伐材でつくられた“積み木”を教材として使うことを除いて、研究授業として特別なことを用意すること

* 提出年月日2009年6月30日 高松大学発達科学部子ども発達学科教授

なく、演習形式で進めている普段の本授業の一コマを、授業研究という視点から見ていただくこととし、当日の授業を計画し、実施した。以下に、研究授業の記録、授業観察者から寄せられたコメント、受講生のこの教材に対する反応、そして彼らのこの授業に対する感想などを記録としてまとめたい。

1. 研究授業の日程

研究授業および検討会は次の日程で行なわれた。

〈研究授業〉

日 時：2008年7月1日（火）2校時 10時40分～12時10分

場 所：体育館

授業科目：保育内容—環境Ⅱ（担当：宮本 富夫）

〈検討会〉

日 時：2008年7月1日（火）6校時 18時00分～19時30分

場 所：2217演習室

2. 保育内容—環境Ⅱについて

保育内容—環境Ⅱの授業内容などは、以下の「資料1」にある授業の紹介、教育目標、授業計画に示されている。なお、この資料は、研究授業実施当日、研究授業見学者に配布された。

「資料1」に補足されるべき内容は次のとおりである。

初回授業時の演習活動の開始に際し、4～5名からなるグループの編成と世話役としてのリーダーの選出がなされた。そして、心がけて欲しいこととして、次の5項が伝えられた。環境にある事物・事象と出会って、1）自分で感じ〈五感をとおして〉、考える。その際、子どもの目線も意識する； 2）そして表現する。ものを言う。文にまとめる。絵に描く……； 3）表現した内容を仲間と比べる； 4）いろんな感じ方、考え方があることを知る； 5）感じたこと、考えたこと、表現したことを共有する。2）の表現するについては、課題の記録用紙が毎時授業の導入の段階で、一人一枚、リーダーを通じて配布され、活動内容をその都度記録していくよう指示された。5）の共有する方法として、

マッピングコミュニケーションという手法が提示され、このための用紙が必要に応じ、各グループにリーダーを通じて配布された。これらの過程をふまえ、与えられた課題に対し、どのような子どもの遊びが考えられるかを、適宜まとめるということも指示された。しかし、課題の記録用紙を、次の授業時まで提出することは課されていない。

研究授業の見学者から、配布された記録用紙などがうまく活用されていない現実があるのではないかというコメントが寄せられた。確かにこの研究授業では、受講生に記録するための機会も時間も用意されなかった。だから、そういった疑問が生じたとしてもなんら不思議ではない。初回の授業時になされた指示に従って、記録用紙をその都度まとめる受講生もいるし、その都度まとめることをしていない受講生もいるのだろうと、授業者は受けとめている。

ところで、課題についてまとめた記録用紙は、次の授業時まで提出することを課されていなかったことが、試験前に課題の記録用紙全体をまとめて整理するという行動をひきおこすことと関係しているかもしれない。このような行動をとる受講生が多く存在するようだと、記録用紙の提出時期を変更しなければならないだろう。しかし、授業者は次の2点から、記録用紙を毎時間ごとに提出するという方法をあえて採用しなかった。まず、演習活動において気にかかったことについて、後ほど、彼らが調べ、考えることがあるだろう、そして、調べ、考えたことを新しい気づきとして、その都度書き加えていくことになるだろう、と想定したから。さらには、受講生が保育内容一環境Ⅱの演習を終えるに際し、活動の内容を全体として一つにまとめる作業を進めるだろう、その際の資料として記録用紙の記載内容を活用することになるだろう、とも想定したから。後者については、最終の授業時に、「保育内容一環境Ⅱを受講して」と題し、演習活動全体をまとめる機会を用意し、個々の受講生が、授業担当者によって特別な指示を与えられることなく、受講生自らの判断で、この作業をどの程度進めてきているかが確認された。

資料1

発達科学部子ども発達学科 保育内容一環境Ⅱ 研究授業

担当：宮本 富夫

研究授業実施日時など

日 時：2008年7月1日（火）2校時

場 所：体育館

保育内容一環境Ⅱについて（シラバスより）

授業の紹介

環境Ⅰに引き続き、子どもが自然や生き物との出会い、かかわりだけでなく、遊具や身近な記号や情報、文字や数字とのかかわりを通して、文字や数字や記号の意味や役割を理解し、日時を理解することができるよう、また、地域社会、人間社会とのかかわりを通して、それらのものに関心をもつよう、好奇心や探究心をふくらませ、さらに積極的にそれらとかわかっていく力が身につくよう援助できるようになるために必要な知識を身につける。そして、子どもに対する理解や子どもとの接し方についての理解を深めることをめざす。

教育目標

- 1) 幼児が環境と積極的にかかわる力を育てるために、保育者として援助できるように、必要な知識と経験を身につける。
- 2) 春から夏にかけての、身近な自然の変化や生き物との出会いを楽しみ、遊びを工夫することができる。
- 3) 幼児が数、量、時間、空間などを理解することができるよう、遊びを工夫することができる。

授業計画

- 第1回 オリエンテーション、幼児の社会環境（再確認）
- 第2回 子どもと環境11 野草の開花マップづくり
- 第3回 子どもと環境12 春の動物：鳥のさえずり、求愛歌
- 第4回 子どもと環境13 雲を観る
- 第5回 子どもと環境14 春の植物：新芽と新緑
- 第6回 子どもと環境15 地域の行事…春祭り、市
- 第7回 子どもと環境16 夏の干潟：干潟の動物、潮の干満
- 第8回 子どもと環境17 水遊び
- 第9回 子どもと環境18 夏の動物
- 第10回 子どもと環境19 太陽の動きⅡ
- 第11回 子どもと環境20 遊具
- 第12回 子どもと環境21 形と空間

第13回 子どもと環境22 風をよむ，ヘリペーパーとストロープレイン

第14回 子どもと環境23 文字と数

第15回 環境と保育計画（その2），まとめ

受講生について

子ども発達学科3年次生26名。内訳は2年次に環境Ⅰを履修したものが21名、編入学生が5名である。環境Ⅰを履修した学生は、秋から冬にかけての自然の事物・現象，地域社会の行事などについて学んでいる。

受講生は、春から夏にかけての自然事象，そして地域の行事などについて、体験あるいは学ぶ機会をもっている。

本時について

- ・本時は、第11回 子どもと環境20 遊具 にあたる。
- ・遊具教材として、ヒノキ間伐材から製作された3種類の積み木，総計1万ピースを用いる。
- ・26人で1万ピースの積み木を使い，五感を働かせながら，積み木遊びを体験する。童心にかえり，心は熱く，頭は冷静に，積み木遊びを楽しむ。
- ・そして，この体験を通して，積み木遊びが子どもたちに何に気づかせ，どのような遊び，楽しみ，そして喜びを提供できるかに気づく。
- ・積み木遊びを通して確認した高さ，長さ，奥行き，大きさ，形，広がりなどの感覚を，次回 子どもと環境21 形と空間 にかかわる演習活動へつなげていく。

本時の流れ

導 入：積み木のシャワー。木の香り、肌ざわりなど感触を楽しみながら、つくりたいものについてのイメージをふくらませる。（～5分）

展 開：積み木を使った遊びを楽しむⅠ（～20分）

それぞれの作品を、少し離れた場所からながめ、積み木を一度崩す（～10分）

積み木を使った遊びを楽しむⅡ（～20分）

出来上がった作品全体を少し高いところからながめる（～10分）

ま と め：積み木遊びを体験することによってえた気づきについて、グループ内で共有する。そして各自演習内容をまとめる。（～15分）

後片付け：積み木を崩し、かたづける。(～10分)

指導について

指示は最小限にとどめ、学生の自主的な活動に委ねる。学生の一人ひとりが自ら気づき学ぶことを大切にしたい。

3. 授業の展開について

授業の展開は、**資料1** “本時の流れ”の項に示されている。補足すべき準備および指示の内容として授業者が用意したもの等は、以下のとおりである。

じゅうたんをひろげ、演習活動の場をつくる。授業時間を受講生自身の演習活動そのものに有効に使いたいため、前もって授業者の方で準備する。

約1000個の積み木を収納している積み木ケース10個を用意する。リーダーに頼み、じゅうたんの適当な位置に、これらの積み木ケースを配置する。

積み木のシャワー（導入）

- ・各グループのリーダーを除いて、じゅうたんの上に目を閉じて寝転ぶ（指示）。
- ・リーダーは積み木の入ったケースを持ち、寝転んでいるメンバーのお腹の辺りから積み木をかける（積み木のシャワー）（指示）。
- ・リーダーも寝転ぶ。授業者の方から積み木のシャワーを行なう。
- ・全員で積み木がもたらす木の香り、感触を楽しむ。お腹の辺りに積み木を引き寄せる（指示）。
- ・少し時間をとる。積み木の香り、感触（量感、質感）、重さなどを体感するために。
- ・作りたい作品のイメージをふくらませる（指示）。

積み木遊びⅠ（展開）

- ・自分の周りにある積み木を使ってイメージした作品をつくる（指示）。
- ・じゅうたんから外に出て、それぞれの作品をながめる（指示）。
- ・積み木を一度崩す（指示）。

積み木遊びⅡ

- ・あらためて作品をつくる（指示）。

- ・出来上がった作品全体を少し高いところからながめる（指示）。

積み木遊びを体験することによってえた気づきについて、グループ内で発表しあう。（まとめ）

- ・グループ内で、マッピングコミュニケーションを行なう（指示）。
- ・リーダーがグループを代表して気づきについて発表する（指示）。気づいた内容について、クラス仲間で共有するために。（時間の余裕があれば）
- ・各自演習内容をまとめる（指示）。

授業者から、授業を終えるにあたって以下のことを受講生に伝える。

- ・多くの人の協力と恵みによって今日の積み木遊びを体験することができました。積み木という遊具について感じ、考える機会をもつことができました。この積み木はヒノキの間伐材からつくられています。総計で一万ピースあります。ヒノキは自然の恵みを受け、育てた人の恵みを受け、育ちました。山でヒノキを育てた人、ヒノキを切り、間伐材として山から運び出した人、間伐材を積み木に加工した人、積み木と積み木遊びの場を用意する上で協力くださったオイスカ四国研修センターの人、日々のわたしたちの生活や活動をささえてくださる人などなどです。その人たちのご苦勞に感謝したいと思います。積み木にも感謝の気持ちを添え、崩し、片付けることにしましょう。各ケースに、最初に入っていたぐらいの量の積み木を収めましょう。

- ・積み木を崩し、かたづける（指示）。
- ・じゅうたんを巻き、かたづける（指示）。

4. 研究授業をふりかえって

「指示は最小限にとどめ、受講生の自主的な活動に委ねる。受講生の一人ひとりが自ら気づき、学ぶことを大切にしたい。」ということで、授業を展開した。なぜそのような授業の展開を考えたのかということ、個々の受講生が何に気づき、何を学んだかをどのような方法で知るかということは、説明されるべきであろう。

この演習において、受講生が積み木遊びを体験することによって何かを感じ、何かをつかんでもらうことが授業者の意図であった。積み木遊びを楽しむことを除き、目標はあえて設定しなかった。何を感じ、何をつかむかには、受講生一人ひとりの過去の経験内容が反映され、個々の受講生によってそれぞれ違ったものとなるだろうと予測し、それでよし

と考えていたから。先ず、積み木遊びを楽しみ、受講生一人ひとりが各人各様に何かに気づき、それをもとに考え、保育環境にある遊具としての積み木がはたす役割の大切な点の何かに気づくよう意図された。26人の一人ひとりが気づいたこと、気づきにもとづいて考えたことを、グループ仲間で、あるいはクラス全体で共有することが意図された。そうすることができれば、おそらく授業者による通り一遍の説明より、はるかに重みのある内容を、個々の受講生が身につけることができるだろうという授業者の考えがその背景にあった。同年齢の仲間と遊び、刺激を与え合いながら成長する、という霊長類の特性は若者には特にあてはまるという（立花 隆、2000）考えも背景にあった。

楽しんで欲しいという意図は十分に伝わっていたように思われる。多くの受講生が積み木遊びに予想以上に熱中するという想定外の展開となった。「子どもの時代を思い出した」という発言もあり、童心に近い状態で取り組んだ受講生もいたようである。このような事態に授業者は柔軟に対応してしまった。多くの受講生が夢中になって積み木遊びを楽しんでいたのも、それを中断させ、計画通りに授業を進める勇気を授業者は持ち合わせなかった。楽しませてやりたいという気持ちの方がまさってしまった。その結果として、積み木遊びを体験することによってえた気づきについて、また気づきにもとづいて考えた内容について、グループ内で共有するという時間がとれなくなった。演習内容を受講生各自がまとめるという時間も取れなくなった。この点については、「やりっ放しの感がある」という指摘はもっともである。何人かの授業見学者からの、「演習内容のまとめ、言語化がなされなかった」という指摘も当然である。当初の計画どおり授業が進められておれば、たぶん、授業のまとめなどはできていたことだろう。授業者の弱さであったと、反省されるべきであろう。

したがって、受講生が積み木遊びを体験することによって感じ、気づき、考えた内容は、後日提出された「演習課題の記録 気づき」欄の記載、「保育内容—環境Ⅱ を受講して」における記載、「この4ヶ月間に経験し、もっとも心を動かされた、子どもに関わる環境要因についてまとめてください」における記載内容から推測せざるをえない。記載内容の抜粋は以下のとおりである。

積み木遊びについて

「…様々なものを作ることができ、創造的な遊びだなど、改めて感じた。」

「…上から見るのと、横から見るのでは、全然違うものに見えた。…いろいろなも

のができていた。人それぞれ違うもので見ていて、おもしろかった。」

「積み木一個一個は、とても小さいけれど、積んでいくうちに大きな形になるので、嬉しくなります。積み木を少しずつずらすと全体の形も変わるので、出っ張ったり、へこんだりと面白いです。」

「上からみんなの作ったものを見ると、大きな街のように見えた。…積み木の種類が少なかったので、初めは何が作れるか分からなかったが、いざとなってみると想像力しだいでもできるんだなあと思った。」

「…グループで作りあげてみて、それぞれがアイデアを出し合い、作品を作り上げることの楽しさ、喜びを味わうことができた。また、様々な遊びができ、他のグループの作品を見ることで色々な遊び方があるということも学ぶことができた。」

「…子どもに戻ったような感覚で夢中になっていた。一人遊びと共同遊び楽しんだ。ごっこ遊びもまじえて行っていた。発想の豊かさや転換、一人ひとり家を造っても一つとして同じものができないことに気づいた。」

「どんどん大きくなっていく姿が目に見えていき、いつ倒れてしまうのかというドキドキした感じが、子どもたちにとっては、ものすごい感覚だと感じた」

「…集中力が高まるし、みんなと協力できるし、はらはらドキドキできるし、積み木はよい玩具だと思った。」

「達成感を味わえる。」

「…遊ぶのに年はない関係ないと思いました。」

ヒノキ間伐材からつくられた1万ピースの積み木に対して、積み木のシャワーについて

「…積み木の量に驚いた。また、積み木で遊んでいると、積み木から、木のいい匂いがしてきて、森の中にいるようだった。」

「…ぬくもりを感じる、」

「塗料も何も使っていない、木そのものの積み木だったので触れた感じや匂いなどがとてもよいなと思いました。加工されているけれど、自然に触れられたような感じがします。」

「…積み木の感触、においなどを五感を通して体全体で感じる事ができた。木のあたたかさを感じる事ができた。」

「…初めて積み木にうまりました。日頃、手で触れることしかないものを体で感じ

ることができました。思っていたよりも重くて、肌触りも気持ちよかったです。」

ある受講生は、一步踏み込み、子どもの思いに気づき、その思いに保育者が共感することの大切さを感じたようである。それまでに幼児教育についていろいろと学んできた経験をもとに、本時の演習活動に集中し、心は熱く、頭は冷静に、積み木遊びに取り組んだ成果として感じ、気づいたということだろうか。Carson (1998) が” THE SENSE OF WONDER” の中で述べる “It is not half so important to know as to feel” を授業者は想起させられた。以下は、その内容である。

「子ども（年長さん）と同じで友だちと協力し、自分や友達ひとりひとり、作業の分担を知らずのうちにしていて、自分の担当するものを必死で作りました。自分たちが実際に積み木で遊ぶことで、改めて子どもたちの積み木でいろいろなものを作る楽しさが分かったように思います。子どもの活動を援助したり、配慮するためには“実際に自分が体験するということも大切なのだ” ということを感じることができました。私にとってこの授業はただ遊ぶということだけではなく、子どもの思いなどにも気づく、遊びに共感するという能力（??）みたいなものが高まったように思います」

同じ受講生が、別の項で以下の内容をまとめていた。感じ、心動かされるという体験が、新しい発見、気づきに導いていくということではないだろうか。

「環境要因についてもっとも心を動かされた授業は“積み木”の授業です。私は積み木で遊ぶということはもう実習の時に、子どもと関わる中で援助する時にしか触れる機会がありませんでした。この授業では子どもが主ではなく、私たちが主として久しぶりに積み木で遊ぶということをしました。その中で、すごく広い場所があること、積み木がいっぱいあること、積み木に3つの種類があり、選んで遊べることなど遊ぶための環境が整っていました。私たちは3人で大きな作品を作り、子どものように大はしゃぎでした。この活動で、ふっと子どもだったらと考え、すごくたくさんの成長につながるのではないかと考えました。それは友達と一つのものを作る協力性や思いついたものを形にするむずかしさ、私は実際に自分で積み木遊び

をしてみると、子どもの発達について考えることができました。他にもアイデアを出し合い、それを一つのものにまとめるなど、先生が作った環境が整っていたため、私たちはたくさんのことを学ぶことが出来たと思っています。このことは逆に、私たちが子どもたちのために先生のように細やかな環境をつくることが出来たなら、私と同じく、子どもたちもたくさんのことを学ぶことが出来るのではないかと思いました。子どもに関わる環境要因は、子どもの成長・発達に大きく関わるため、とても大切なものであるということが分かりました。私も先生のようにきめ細やかな配慮をし、活動をするための環境を十分整え、子どもたちを援助できるようになりたいと思いました。」

このように、個々の受講生がそれぞれ何かをつかんでいることが読み取れる。話し合い、共有する時間が用意されておれば、これらがクラス全体で共有されたいだろうと思われるだけに、まとめとして共有する時間を用意しなかった点は深く反省されなければならない。

5. 研究授業見学者から寄せられた授業改善にかかわる点について

研究授業見学者から、授業改善にかかわる点として、①教育内容、②授業方法について、多くのコメントが寄せられた。いずれも、授業者が今後の授業を実施する上で、改善事項として生かされなければならないポイントであると受けとめている。

先ず、①教育内容に関するコメントから検討していきたい。コメントをそのまま引用し、次に授業者の考えを述べるというかたちで、以下をまとめたい。

『本時の活動が保育学生として、子ども達の遊びを援助する者としてどのような意義を持つのか、環境構成のポイントはどこか、あるいは、自分たちが遊びに「はまってしまった」秘密はどこにあるのかを理解させる指導の必要性を感じた』

『環境と子どもの相互作用が学生自身の遊びの中に見られたので、その点も指摘・指導すると、学生の納得的な理解をより深化できたのでは』

『受講学生には、今回「子どもの目線」で体験した遊びを「保育者の目線」で考えさせる取り組みが必要』

『体験の経験化（言葉による意識化）への方向づけ』

これら4つのコメントは、もっともであると授業者は考える。コメントに述べられているようなことについても指導されることなく、受講生が自ら気づき、考えるよう意図されていたからである。大学の授業であること、受講生は他の関連する授業科目を受講する中で幼児教育について学んできていること、将来何らかのかたちで教育に携わることを目指していること、などを考慮するなら、受講生は当然気づけるだろうという期待があった。実際には、気づく内容は受講生によってそれぞれ異なり、気づきのレベルも低次元から高次元まで、それぞれさまざまだろうと推測されるが、それでも彼らの気づきを大切にしたいと授業者は考えていた。気づきはいわば小型の発見みたいなもので、発見の喜びがなにものにも換えがたい要素をもつことを考慮し、この喜びを彼らに味わってほしいという願いをもっていたから。少し甘いといわれるかもしれないが、気づき、喜び、そして考えるということが連鎖反応的に続いていくようになれば、彼らの気づきの範囲がどんどん広がり、その内容も深まっていくだろうとも考えている。

『「感じたこと」「考えたこと」などを発表する場があっても良かったのではないか』

『完成した作品を鑑賞しあう時間があれば、感動や他の学生の工夫した点などもわかったのではないか』

これら2つのコメントについては、そのとおりだと思う。本研究授業のスケジュールには受講生が気づいた内容、それをもとに考えたことをお互いに共有する時間をとっていたので、スケジュールどおりに授業を展開しておれば当然行なえていたはずのことが、前述したように、この研究授業ではなし得なかった。授業の進行における授業者の決断の弱さであったと反省したい。

次に、②授業方法に関するコメントについて検討したい。

『授業中行なわれたことや作品などまとめや締めくくりが、あの時には見られなかった。(先生が意図されていたことが、学生に伝わっていたのか、学生が理解したのかを、どの時点で確かめるのか、分からなかった。)]』

『積み木遊びの活動が幼児にとってどのような意味を持つものかを学生に自覚させる場面がもっとあっていいのではないか。例えば、積み木で作った作品を離れたところから眺める場面では、「幼児に、離れたところから幼児の作った作品を眺めさせることの意味・効果」を考えさせたり話あわせたりする。同様に、体育館のギャラリーのように高いところから作品を眺めることが、学生自身にとってどのような気づきを得られるかと同時に、将来保育者となって幼児に積み木遊びをさせる側の視点に立った話し合い意見交流があればいい。』

『それが授業の目的だったのかもしれないが、どのような観点で作品を見ればいいのか、これらの体験がどのような目的のために行なわれたのかを授業の最後にまとめた方が良かったのかも知れない。なんとなく、やりっ放し感が学生の中に感じられた』

『平面的な視点から、また、鳥瞰的な視点から自分たちの作品はもとより、他の人たちの作品も観察したが、話し合い等、言語による情報交換の場があってもよかったのではないか。メタ認知を確かなものとするためにも…。』

『活動の中で学生個々が感じ取ったものをどう共有化するかという所にももの足りなさが残った。』

『反省会でもあったように、この授業から何が学べるかという全体的なまとめの言語化に関しては十分でなかったかもしれない。』

このように多くのコメントをいただいたことに感謝したい。今後の授業方法を考える上で、役立てたいと思う。この研究授業がスケジュールどおり進行されなかったことと何らかのかたちで関わる内容もあるので、授業を中途半端なかたちで終わらせることなく、計画していた授業の全体について展開することを心がけたい。

『本時に行なわれた取り組みは、ドイツやイタリアで行なわれている保育方法「プロジェクト活動」と重なる部分があるように思われる。子どもたちが個々に多様な（充実した）活動場面を展開するため、教員（教員たち）の準備は相当なものとなっている。さらなる授業展開をお伺いしたい。』

「プロジェクト活動」という保育方法について、授業者はまったくの不案内である。この保育方法について学びながら、どこがどのように重なっているの

か考えていきたい。そして、今後の授業の展開に役立てていきたいと考える。
情報の提供に感謝したい。

『積み木を借りてきた団体の方が来ているので、その方の話を学生に聞かせてもよかったのではないかと。(ヒノキの間伐材で作った積み木を幼児に使わせることの意味・効果・製作者の願いなど)』

当初の計画では、オイスカから積み木のみを借りてこの授業を展開する予定で準備をすすめたため、この点についてはまったく考えていなかった。「20歳前後の学生さんが1万ピースの積み木を前にどのように反応するのかをぜひ見学したい」という吉田智子さん（オイスカ四国研修センター）の希望で、当日たまたま彼女が見学に加わったような経緯があった。この点についてもご協力願うべきだったかもしれない。

『場所が体育館だったこともあり、いつもとは違う、広い場所だっただけに、教師の指示の声が少し小さかったので、学生が何をやるのか戸惑っている場面が見受けられた』

学生に何をやるかについて戸惑いがあった点は、反省事項である。指示する際の声の大きさを含め、気をつけたいと思う。

6. 研究授業見学者から寄せられた授業を積極的に評価する点について

さらには、授業を積極的に評価できる点として、①教育内容、②授業方法について以下のような多くのコメントをいただいた。

①教育内容に関するコメントについて

いただいたコメントをそのまま引用させていただく。

『エコロジーや環境の自覚を促す授業であった。』

『広い空間を利用し、ヒノキの間伐材というすぐれた教材を使って環境問題を考えさせる事と、創造性を導きだしていた。』

『幼児を取り巻く環境の中から、幼児が触れたり目にしたりするであろう野草、植物、遊具といった具体物を取り上げていること』

『具体的な事物に触れる時間を十分に保証していることで、幼児と同様に自然の変化や生き物との出会いを楽しみ、遊びを工夫する方向に学生の意識を向けさせることができていること』

『積み木を体感する——積み木の木の感触やヒノキの香りを寝転んで感じるという導入は、学生も新鮮であり、いつもの授業にはない体験であったと思う』

『ヒノキ間伐材から製作された総計1万ピースもの積み木に、学習者を興味・関心を高め、引きつける魅力に溢れた教材であった。積み木そのものに、授業を楽しむ豊富な「仕掛け」が仕込まれていた。』

『1万ピースにのぼるヒノキ間伐材を使用しての積み木遊びは、木の香りが溢れる、正に、森の中で自然に浸りながら遊びに耽っていることを学習者（学生）に本授業のねらいに沿ったすばらしい内容の授業であった。』

『“子どもと環境”という大テーマの内の小テーマ“遊具”の学習として、“積み木”を用いた遊びの演習』

『積み木の特性（積み重ねる・並べる・くずれる・高く・広くなど）を生かした活動がとても楽しくできていた。』

『小さな積み木を使って、大きな構造物を完成させた喜びや充実感を味わった学習が展開されていた。』

『本授業の目標は、積み木を使った学生の自主的な活動から発生する気づきを考えることだと思う。そのさい、内容を獲得させる教材として積み木の役割は非常に大きかった。学生にとって直接の対象物である積み木は、言葉主義的なものではなく、イメージを広げ、また操作方法の幅をもった具体物であった。このため、積み木は、導入時点では、シャワーとなり、木の香りや肌触りを体感させた。さらに、積み木を媒介物として、学生同士で協力し合い、作成を楽しみ合い、時には積み木の作品が壊れることから残念がったりした。加えて、互いの作品を評価し合うことが行われ、より一層イメージを共有し、想像力を高め合っていた。このため、保育者、教育者としての創作的な資質と共に、チームワークやコミュニケーションの能力についても獲得していく契機を生み出していた。』

『1万個の積み木という、日常からかけ離れた環境を学生に用意し、学生が童心に

返って、「遊ぶ」ことを導き、それが将来の教育活動に何らかのかたちで生かされるだろうということを感じることができた授業であった。』

『受講学生に十分に活動させるための環境が構成されていた（場所：体育館、準備物：広いじゅうたん、10,000の積み木片など）。』

『内容が子どもの目線で「積み木で思いっきり遊ぶこと」に限定されており、受講学生に「子どもになってしっかり（夢中になって）遊ぶ」ための時間も十分設けられていた。学生は集中して（夢中になって）活動することができたのだろう。』

授業者本人が気づいていない点もご指摘いただき、感謝この上なく思う。今後の授業に有効に生かすことができるように努力したい。

②授業方法に関するコメントについて

これについても、以下にそのまま引用したいと思う。

『広いカーペットの上で、ゆったりと、グループにわかれ、思い思いの発想に基づいて、作品を作ることを通して、子どもと環境を考えさせたこと。』

『1万ピースのヒノキの間伐材に自由にふれることにより、子供のころ体験したような喜び、感動などを個人、グループで作品として作り上げていた。一度目より二度目は立派なものが出来、学習成果が見られた。』

『授業環境の設定がすばらしい。ヒノキの間伐材からできた3種類の積み木を1万ピース用意している。また体育館の絨毯の上に積み木をばらまいている。教材の量、教材を配置する空間がともに十分であることから、学生が幼児に戻った感覚で積み木を使って様々な活動を体験できていた。この活動を通して得た、高さ・長さ・奥行き・大きさ・形・広がりといった感覚をもとにして次の学習内容につなげていくことができる。』

『一人遊び、集団遊び等、いろいろな形で取り組みができ、「積み木」という教材に対して、アプローチが多様であった』

『自分たちの作品を一度崩さなければならないとき、いろいろな思いが学生の中によぎったと感じた“せっかक्तくったのに…” “えいっ、やっしまえ！” “もう!!” など』

『積み上げる一崩れる という過程の中でいろいろな思いや達成感があった』

『積み木での活動を2つに分け、1回目は14分で終了し、2回目は50分の時間をとることによって学生は積み木で遊び込むことができた。これだけ多量の積み木で遊んだ経験はおそらくないであろうから、とても良い経験になったことと思う。』

『あえて教員が誘導することなく、学習者の自発性に委ねグループ編成や学習活動を進めてゆく授業方法がとられた。中には、1人で活動する学習者もいたが、大方はグループを作り、それぞれのideaと経験を活かしながら協働作業により学習課題に粘り強く取り組み作品を完成させた。学習者の自発性の涵養を意図した授業の在り方について多くの示唆を得る事ができた。』

『寝ころがれるマットと積み木という遊びの環境のみを用意し、努めて非指示的態度を守り、学生の自然な活動を演出した。』

『ゆとりと教師の指示の少ない、学生の自主的な活動を大切にした授業展開は学生が集中して作品作りに取り組んでいた。』

『学生の表情が大変よかった。』

『授業展開において、最初の「積み木を使った遊びを楽しむⅠ」では、授業者は、学生に対する声掛けや方向づけをひかえているようであった。約20分後、絨毯から離れるように学生に指示を与え、さらに、作品を壊すように指示した。その後、もう一度「積み木を使った遊びを楽しむⅡ」が展開する。ここまでの授業展開において、授業者の指導性は、絨毯から離れさせる、つまり、「それぞれの作品を、少し離れた場所からながめる」ことによって、学生同士に思考刺激を与え、学生間に相互評価が自主的に行なわれている。例えば、作品のすごさ、面白さ、協働してつくることなどである。さらに、こうした学生同士の評価とともに、授業者は「積み木を使った遊びを楽しむⅡ」のさいには、学生たちの作品を見ながら声掛けを行っていた（学生「子どもの時代を思い出した」教師「思い出した!?!」「…(不明)…協力するって大切や」教師「どれぐらいの高さまでいけるかな」)。そうした声掛けが、学生たちの作品を方向づけ、また周りの学生にも刺激を与えているのである。さらに、「出来上がった作品全体を少し高いところからながめる」ことにより、より一層学生間に相互評価が生じていた。そうすることで、教師が直接的な指導を行なうこと以外に、学生同士のイメージの共有や競争が生まれ、ある学生のグループは、より高いタワーを作り上げ、また、台形の積み木のみ集めた作品など、積み木のかたちこだわった作品、さらに、螺

旋型の作品など、形や空間に関して直接指導することなく学生の自主的な活動から新たな作品がうまれていた。』

『学生の気づきを大切にし、指示を最小限にとどめていた点』

『鳥瞰で見せるなど、視点が変われば作品の見え方が変わるという気づきの機会を与えている点』

『何かを無理矢理「教えよう」としていなかった点』

『授業担当教員が、「控えめなコメント（助言）」に終始していたからこそ、学生の遊びが発展し続けていた。』

いろいろな視点、角度からよいところを見つけられ、教示くださったことに感謝したい。これらのポイントを生かしながら授業をよいものとしていきたいと考える。

③その他の項でも以下のコメントをいただいた。そのまま再現したい。

『積み木の香りはとてもさわやかであつたし、積み木のシャワーなど学生が発想しない活動が組み込まれていて、参観する者にとっても楽しかった。』

『教材に積み木という遊具を選んだことがすばらしい。』

『教材を媒介とした協働の視点が存在していた。大学の講義や演習では、学生同士が真剣に協働する場面を作り出すことは難しい。しかしながら、数に限りのある積み木を使うことにより、同種類の積み木を必要とする学生は、別のグループの学生に積み木を借りることを交渉したり、また積み木を積み上げる手伝いを要求するなど、学生間での協働が盛んに行なわれていた。こうした学生間の協働場面も特筆すべき内容であると考えられる。』

『学生の状況を見て、計画されていた時間の配分を柔軟に変更した点』

あたたかいコメントに感謝したい。

おわりに

研究授業を実施することは今回が二度目である。最初の研究授業は、30数年前、高校3年生を対象に「生物」の授業を行なったと記憶している。演習形式の授業での研究授業は

今回がはじめてだった。受講生がグループごとに、あるいは一人ひとり取り組む形での普段の授業風景を見学していただくことも当初想定したが、見学者にも楽しんでもらえる形がふさわしいのではないかと考え、1万ピースの積み木を教材として使う授業を研究授業とすることに決めた。約1年にわたって保育内容—環境の授業に取り組んできている受講生の成果を私自身が少し確認したい気持ち、そして子ども発達学科の先生方にも確認していただきたい気持ちが少しあった。一人でも取り組める、グループでも取り組める多量の教材を前に、どのような遊びを展開していくのか、どのような行動をとっていくのか、どのような点に気づいていくのか、などについて。

予想を越えて集中し、遊びを展開する学生を前に、授業展開を計画どおり実施することを途中で断念するという失態を授業者が演じることになった点は、受講生および授業見学者にお詫びしなければならないと思う。その結果、受講生それぞれが発見した気づきを言語化し、共有することができなかった。授業見学者には、まとまりのないやりっ放しの授業展開を見ていただくことになった。申しわけなく思う。

お忙しい中、時間を割いて授業を見学し、検討会に参加し、その上適切なコメントを提供いただいた授業見学者の先生方に感謝いたします。そして、1万ピースの積み木と関連の資材を提供し、当日会場の設定に協力くださったオイスカ四国研修センターの吉田智子さんに謝意を表したいと思います。最後に、実習明けにもかかわらず、研究授業にこころよく協力してくれた受講生に感謝します。

引用文献

1. 立花 隆 (2000)『脳を鍛える』新潮社
2. Carson, Rachel L. (1998) "THE SENSE OF WONDER" Harper Collins Publishers

研 究 紀 要

第52・53合併号

平成22年 2 月25日 印刷

平成22年 2 月28日 発行

編集発行

高 松 大 学

高 松 短 期 大 学

〒761-0194 高松市春日町960番地

TEL (087) 841 - 3255

FAX (087) 841 - 3064

印 刷

株式会社 美巧社

高松市多賀町 1 - 8 - 10

TEL (087) 833 - 5811